

あとがきⅡ

映画文学人生論

山本周五郎 『青べか物語』(1960)
『青べか日記』 『愛妻日記』 『戦中日記』
夏目漱石 『文芸の哲学的基礎』(1907)
島崎藤村 『春』(1908)
正宗白鳥 『このごろ疑問に思ふこと』(1960)

吾々は生きたいと云う念々に支配せられて
おります

第二ラウンドの二年間で、また、小説を中心に
百篇を読んだ。あわせて二百篇。よくやった、も
ういつ死んでもいいとは思うが、まだ読んだりな
い、命ある限り・・・という気分もある。

とはいうものの、私も今や高齢化がすすんで、
眼がかすんできた。今後は読書のペースを一年間
十篇に抑え、十年間であと百篇、あわせて三百篇
という目安にしたい。

そもそものきっかけは、山本周五郎『青べか物
語』の登場人物が抱いた疑問「人はなんによつて
生くるか」——その問いかけに私は郷愁のような
ものを感じた。映画『男はつらいよ』の寅さんが
生まれ故郷の葛飾柴又に帰りたくなるように、古
い日本をふりかえるころの旅をしたくなった。

要するに、昔の日本の映画をDVDで観て、小
説を読むだけのことだ。主として明治、大正、そ
して昭和四十年頃までに話題になった、私の年齢
でいうと三十歳までのものがほとんどだ。

大衆文学の作家とみなされていた山本周五郎が
『青べか物語』を書いたのは昭和三十五年。「人
はなんによつて生くるか」は純文学の問いだが、
安保闘争で学生たちが騒いでいた当時、純文学作
家でもそんな青くさい問いかけはしない。蒸気河

あとがきⅡ

映画文学人生論



岸の先生は時代遅れの作家であった。

正宗白鳥が、「私などは、衰微し、没落しつつある所謂「純文学なるものに或る郷愁を覚えてゐる」と書いたのもその頃である。当時すでに純文学は郷愁の対象だったのだ。

それから半世紀後の現在にはさらに時代遅れのはずだが、どういうわけか私の心の深いところにひびく。この問いは時間を超えている。人類が滅びないかぎり、時代遅れになりそうもない。

蒸気河岸の先生の死後、遺族の承諾の下に、公表された日記には、「生は我々に何を与えてくれるか」（昭和三年十月十四日）とか、「人はいかに生くべきか。世の律によるべきか。己の欲するところを持すべきか」（昭和十七年十一月二十四日）などという記述がみられる。

このような日記の記述から、「人はなんによって生くるか」という『青べか物語』の登場人物の問いは作者自身の問いだったことがわかる。

『青べか物語』の執筆は昭和三十五年でも、作者の時間は昭和三年や昭和十七年にもつながっているのだ。さらにまた、「ああ、自分のようなものでも、どうかして生きたい」（島崎藤村『春』や「吾々は生きたい」という念々に支配せられておられます」（夏目漱石『文芸の哲学的基礎』）など他の作者の意識にもつながっていると思う。

筒袖や秋の枢にしたがはず

漱石